

卒業展

2019 Nagoya University of the Arts



【特集】
名古屋芸術大学
卒業制作展
名古屋芸術大学大学院
修了制作展

名古屋芸術大学グループ 通信

51
April
2020

Master Artist

マスターアーティスト

何かがはじまる!?
美術領域 准教授
田村友一郎

名古屋芸術大学
産学官連携プロジェクト

ヴィジュアルデザインコース
名古屋城本丸御殿にて「ナゴヤ展」を開催



名古屋芸術大学グループ

<http://www.nua.ac.jp>

■名古屋芸術大学・大学院：音楽研究科 学部学科：芸術学部 芸術学科
美術研究科 音楽領域 デザイン領域
デザイン研究科 美術領域 芸術教養領域
人間発達研究科 人間発達学部 子ども発達学科
■名古屋芸術大学保育専門学校
■名古屋芸術大学附属クリエイション
■滝子幼稚園 ■たきこ幼児園 ■愛知保育園
■幼保連携型認定こども園 森のくまっ子 ■名古屋音楽学校



卒業展

2019 Nagoya University of the Arts



Feature

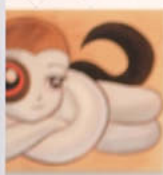
名古屋芸術大学 卒業制作展

名古屋芸術大学大学院
修了制作展



今年で、3度目となる学内での卒業・修了制作展。大学の4年間、大学院の2年間の集大成を発表する作品展です。新型コロナウイルスの影響で、残念ながら人が多く集まるイベントは見合わせ、講演会も中止となってしまいました。さまざま縮小される中での開催で来場者の出足が心配でしたが、多くの方にお越しいただくことができ、学生、スタッフともに安心しました。今回も、スタンプラリーやカフェ、アートショップなど盛りだくさんの企画を用意していましたが、難しい状況の中での開催となりました。

■ 一人でも多くの方に作品を見てもらいたい



Art &
Design Center
学芸スタッフ
磯部絢子



今年は日程的に短い開催となりました。昨年は2週間期間がありましたが、今年は週末を2回含む10日間の開催です。運営側の目標としては、集客にこだわりました。来場者を増やし、一人でも多くの方に学生の作品を見ていただくことで、学生に還元できると考えました。来場者にはお祭りのように楽しんでもらえるよう、ポップな感じのポスターを作成し、スタンプラリーやバッジを企画・用意しました。名鉄の駅に100枚のポスターを貼りました。すべて学生の手による1点ものです。車内広告は2000枚掲示、遊び心といいますか、シークレットで2000枚のうち100枚はシールを貼ってデザインが変えるんです。そんな仕掛けをしてSNSで発信するなど、いろいろ試しました。まだ、最終的な

めはしていませんが、おかげさまで、1日あたりの平均でもトータルでも昨年を超える数の方に見ていただくことができました。

今年の試みとしてもう一つ、作品を販売するアートフェアを開催しました。学生に、自分の作品が売れるということを体験して欲しいと思い立ったのと、私自身、ミュージアムショップが好きで、集客にも役立つのではと考えました。たくさんの作品が売れ、とても嬉しく思います。また、こうしたショップを大学内に常設して欲しいという声もたくさんいただいています。

作品については、大学内での卒業

も3回目を迎え、学生たちの展示の仕方が上手くまとってきたなという印象を持っています。完成度の高い、密度の濃い作品が多いと感じました。個人的には、制作が難しいのですが、歩いているだけで目に飛び込んでくる屋外の作品がもっと増えるのかなと思っています。学年によって個性が違いますが、学生らしいパンチの効いた作品も、もっと出てきて欲しいですね。多くの来場者に、作品の完成度の高さを感じていただけたようでもありますし、何より楽しかったという声が聞けたことを嬉しく思います。

2つのコンセプト

芸術学部 芸術学科 美術領域
日本画コース 4年
増岡美紀さん

作品名は「関心」。コンセプトとして2つのことを考えました。ひとつは、自分と他者とのこと。自他論といいますか、他人を認識することで自分を認識するような、そういう考えを自分なりに解釈した作品です。牛（バイソン）が2頭、お互いを感じていて、相手を認識しながら自分を見つめているような感じに仕上げようと考えました。近い関係ですが、混じり合っているわけではなく、少し距離を置いた関係です。制作しているうちに、相手に関心を持っていることを表すにもいろいろな形があることを感じました。

もうひとつのコンセプトは、人間に殺される生き物としての牛です。私は、この2年動物を中心に描いてきました。テーマとして生き物を描くことには、血や肉についての考えがあります。絵の背景にある赤は、血をイメージしています。東山動物園で観察することが多いのですが、肉牛と



「関心」

して飼われている牛とは違いますね。肉牛として飼われている牛たちは、いつか殺されてしまうことに気が付いているような気がしてなりません。でも、動物園の牛たちは、そのことを意識しないで暮らしています。関心があるのかないのかよくわかりませんが、「関心」というキーワードにつながっているようで、タイトルにしようと考えました。

絵の牛たちは動物園で見た雌牛と若い雄牛ですが、たまたまこのポーズになっていて惹かれました。人間も2人で立っていると、恋人だろうか、親子だろうか、友達だろうかと関係性を想像します。そうしたことを読み取ろうと想像することが

面白いなと感じています。

私は、自分が人からどう見られているか、気にするタイプでした。よく見られたいと意識していました。でも、それってどういうことなんだろうと考えるようになり、哲学的な観点から考えたいと本を読んだり、勉強したりしました。自分と他者との関係性や自分について考えたこと、それを絵の中に入れていきたいと思い、絵画としての魅力につながるようにと考えました。描いているうちに、他人からよく見られたいという意識は薄れていき、今はどう見られてもいいという考えになってきています。

紙という素材の未来

芸術学部 芸術学科 デザイン領域
ライフスタイルデザインコース 4年
大北貴志さん

実家のある三重県、大学のある愛知県の11の一級河川の水を使って紙を漉き、その比較を行いました。“ペーパーフリー”という言葉があります。紙が不要になりつつある時代ですが、本当にそうなのかという疑問を持ちました。ペーパーフリーを直訳すると、紙が自由になるという意味でもあります。紙が不要になる時代は紙が自由になる時代であると捉え直し、これまで固定化されてきた紙の概念から解放され、もっと高い水準で必要とされるようになると仮定しました。では、高い水準とはどんなことかと。素材としての肌触りや風合いを残しつつ、ローカル化され多様化していくことと考えました。水の違いで紙の違いが生まれることを知り、さまざまな川の水で紙を漉いてみました。紙の違いは、その地域特有の風土を表すことになりました。

もともと素材に興味がありました。僕は、あるパン屋さんのバゲットが大好きなのですが、原材



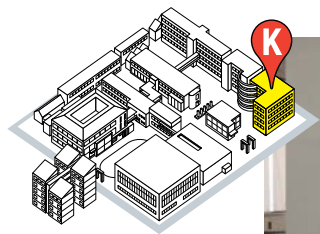
ブライトン大学賞奨励賞 「川水紙」

料はどのパン屋さんもそれほど違いはないはずです。でも、違いがある。どうしてだろうと考えました。パンも身近なもののですが、身近なもののことはかえってあまり知りません。大学で紙をたくさん使ってきましたが、紙を作ることに深く考えていませんでした。調べてみると知らないことばかりでした。水についても同じです。身近なものだから知らなくて、でも、身近なものだからこそ表現したいと考えました。

土佐和紙について調べ、高知県のいの町紙の博物館に行ったとき、学芸員の方から昔は川で原料をさらし、川の水で直接紙を漉いたと伺いました。また、紙を見て川の違いを見極める目利

きがいたと聞きました。そして、川の違いで紙の違いが出るだろうと、ことによったら生活排水など、その日、その場所からしか得られない変化が生まれるだろうと考えました。

ローカルで多様化されていくことに関しては、グローバルとローカル、相反するものではなく、一対のものではないかと思っています。ローカルなものを丁寧に発信することでグローバルにつながる。ローカルといえど、グローバルにつながる面があると思っています。もっと紙の使用が減った将来、素材としての紙の重要性が増してくるのではないかと考えています。



大学賞 優秀賞



日本画「あなたへ」丸田妃奈乃



アートクリエイター
(コミュニケーションアート)
「Child man」伊藤沙羅



日本画「寒雷驟雪図」三柳有輝



アートクリエイター (コミュニケーションアート)
「プロポーズ」中村大樹

ブライトン大学賞 優秀賞



日本画「Cat dweller」高橋古都美



日本画「愛着の起点」中島麻希



日本画
「カフェイコレクション」
貝塚葵



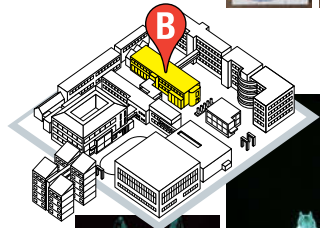
日本画
「春夏秋冬」
黒田侑花



日本画「Live COOL!!」鈴木大貴



アートクリエイター (版画・平面)
「カメのいる日常」細井奏見



協賛賞 学生食堂賞

アートクリエイター
(陶芸・ガラス)
「流るゝ光を帯びて」
星野夏実



アートクリエイター
(コミュニケーションアート)
「星の死めとき」阪野梨加



アートクリエイター
(コミュニケーションアート)
「Connect to ...」東大地



アートクリエイター
(陶芸・ガラス)
「薄暗」内田沙貴

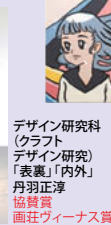


アートクリエイター
(陶芸・ガラス)
「邂逅」木下弘規

大学院修了制作展 A&D センター



デザイン研究科
(ライフスタイルデザイン研究)
「コトノハ」川崎智絵



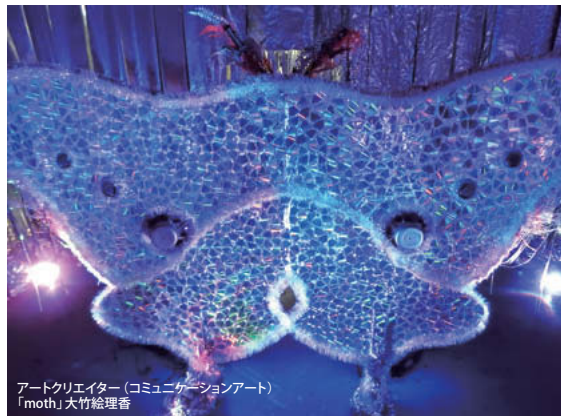
デザイン研究科
(クラフト
デザイン研究)
「表裏」「内外」
丹羽正淳
協賛賞
画荘ヴィーナス賞



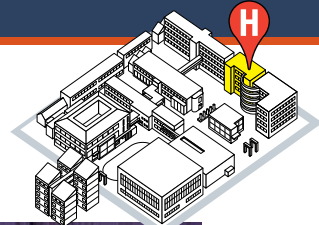
美術研究科 (同時代表現研究)
「こどもの国」「物憂け」「カミカゼ」
下家杏樹



アートクリエイター (コミュニケーションアート)
「IMPARIAL INDUSTRIES」山下公平
CAPアートクリエイターコース特別賞
協賛賞 画荘ヴィーナス賞



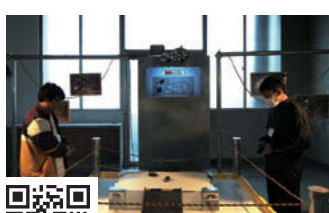
アートクリエイター (コミュニケーションアート)
「moth」大竹絵理香



CAPアートクリエイターコース特別賞



「COLORS」



アートクリエイター
(コミュニケーションアート)
「RCコンパット」大森啓夢



アートクリエイター (コミュニケーションアート)
「day dream believer」杉浦綾
大学賞 優秀賞
ブライTON大学賞 佳作



アートクリエイター (版画・平面)
「私はリンゴについて考える」栗田光国



アートクリエイター
(コミュニケーションアート)
「意識BS」土井聡士



アートクリエイター
(版画・平面)
「泳ぎ続けたヒレのディアラ」
「迷子の宝物」他
浦山輝子 優秀賞
大学賞 優秀賞

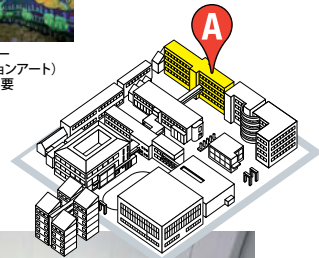


アートクリエイター
(コミュニケーションアート)
「死への憧れ、生への執着」
近藤明



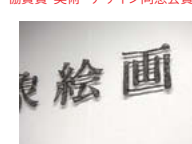
アートクリエイター (コミュニケーションアート)
「ten」佐々木良宏

アートクリエイター (コミュニケーションアート)
「日本の大動脈」諏訪康広
CAPアートクリエイターコース特別賞



アートクリエイター
(コミュニケーションアート)
「fremynisce」白幡彩華
CAPアートクリエイターコース特別賞

アートクリエイター (美術文化)
「抽象絵画における音楽的表現」
別部ちひろ
協賛賞 美術・デザイン同窓会賞



卒業制作展記念講演会 特別客員教授 湯山玲子氏「現場主義のアートマネジメント」開催

2020年2月24日(月)、著述家・プロデューサーである特別客員教授湯山玲子氏をお招きし「現場主義のアートマネジメント」という演題でお話しいただきました(29日に予定されていたAC部 安達亨氏 板倉俊介氏の講演はコロナウイルス感染防止のため中止となりました)。

講演に先立ち、津田佳紀副学長からご挨拶、湯山氏のプロフィールの紹介がありました。これまでに出版された著書に加え、幅広い活動の一端を紹介、アート、演劇、クラブカルチャー、音楽、食文化とさまざまな分野で活躍していることが紹介されました。

講演は、自身の経歴の説明から始まりました。男女機会均等法以前、歴然と就職に男女差別があった時代に、カルチャー情報誌「びあ」に新卒として入社、編集者としての経験が現在の活動のベースにあるといいます。「基礎教養、ナレッジの全ては、編集者、という仕事にあった」として、著述、コンテンツの制作、広告制作、コンサルティング、プロダクト・クリエイティブ、エキシビション、イベント……、これら全てのことを編集者として現場に接することで身につけたといいます。90年代までは、そういった仕事の多くは資金とマンパワーが必要で、どうしても組織力が無

ければ実現できなかったのですが、現在ではインターネットを使いアートマネジメントができるようになったといいます。湯山氏は、さまざまな分野で活動していますが、全ての活動に共通することとして、アートに関しての考え方とお金に関しての考え方に独特の視点があります。アートに関しては、現代アートのあり方について多くの議論の現状ですが、アートは、単に人を慰まし、楽しませるというエンターテインメント性だけではなく、あるときには人間の間に抵触し「心に傷を残す」ことがあるわけで、清濁併せ呑むような、寛容性が重要といいます。お金に関しては、「お金は人を鍛える」と説明し、開催者側であっても参加する側であっても、金銭的に見合うことが重要であり、常に金銭のやりくりを考えて採算の合う方法を考えなければならないといいます。表現に即したマーケット(顧客)の存在を、それを無視するにせよ、意識しなければならず、同時に時代性も考慮しなければならないと説明します。マーケティングでは、性別、年齢といったマーケットの属性を重視しますが、徐々にそれが合わなくなってきた現状について説明します。個人的な嗜好が優先されることが増え、世代論的な考え方が実情に合わなくなってきたと問題提起し、本格的、孤独、といった男性をイメージするキーワードは女性に当てはま

り、男性は女性にやっていたことに当てはまる、男女が入り替わったり混在するように新たなチャンスがあるのでは、と自身の経験を交えて説明しました。仕事としてマネジメントを行うにあたり、プロダクション的に依頼を受ける受注仕事、タイアップ的にコンサルを行う仕事、自発的に表現を行う自分の仕事という3つの方向性があり、それぞれにリスクがどこにあるのか、失敗した場合に誰が金銭的な負担を負うのかを考えておくことが重要といいます。このとき、自分で責任を負う場合であれば保険に加入するなど、現実的な対応についてもアドバイスしていただきました。また、アートマネジメントはSNSとオンラインチケット、クラウドファンディングを活用すれば、個人であってもこれまで広告代理店がやっていたようなことが可能で、ひとりて企画を実現できる時代になっているといいます。ホリプロ代表の堀義貴氏の「現代のコンテンツ産業はプロと大衆の時代である」という言葉を引用し、プロのクオリティの高いクリエイションは残っていく、しかし、そこは棲み分けが必要で、プロがアマチュアもどきを仕掛けると、中途半端なものになり失敗しやすいといいます。ことに印象的なのは、マネジメントは「好きと愛でやってはいけない」と説明し、オタクはそのジャンルの愛好者との係わりがなく拡がっていくがジャンルを

減らす、愛するジャンルにあえて距離を取り、客観的な視点に立ちその領域を見ることによって、ジャンルに欠けている要素を見出すことが利点につながると話しました。

これまでの活動を紹介する数々の画像と映像の紹介に加え、後半は自発的な活動として、クラシック音楽を自然環境や歴史的な建築物、トンネルの中など、さまざまな環境で演奏、聴取する「爆クラ」についての話になりました。サロン、プラネタリウム、水族館……、さまざまな場所やジャンルとのコラボレーションで、新しいクラシック音楽の聴き方を提案する活動ですが、これまでに説明していただいたアートマネジメントの考え方から派生した活動であることが理解でき、納得させられるものでした。異なった場所や異なったジャンルが混ざり合うことで新しいものが生まれることを体現するイベントで、編集者としてのセンスが息づいていることを感じさせました。常に、採算性を考え、企画を実現するためにはどうすればいいかを考えることで企画を実現させており、一貫した姿勢に感銘を受けました。マシンガントークという言葉がふさわしい言葉数の多さと多岐にわたる情報量の多さ、示唆に富む含蓄を含んだ言葉の数々、質においても量においても圧倒される講演となりました。



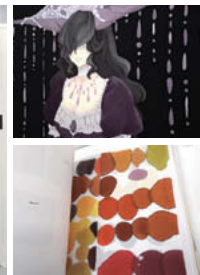
テキスタイルデザイン
「花東ワンピース」中嶋すみれ
大学賞 最優秀賞



テキスタイルデザイン
「AKMワンダーランド」角屋美空



テキスタイルデザイン「ARMOR」大西礼華 大学賞 優秀賞



テキスタイル
デザイン
「毒蛙」伊藤嶋馬



アートクリエイター
(コミュニケーションアート)
「曙光」佐藤亜海

大学賞 優秀賞



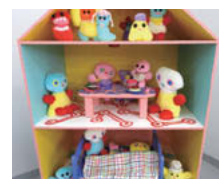
テキスタイルデザイン
「醜禪幻羅舞」永田英未莉



テキスタイルデザイン
「ラインで描く食べ物」中野舞子



メディアコミュニケーションデザイン
「同じ時間、違う景色」伊藤里穂



テキスタイルデザイン
「地球だよ!はぐれ星人集合!」
深谷奈津美



テキスタイルデザイン
「mofumogu」
菅瀬彩音



メディアコミュニケーションデザイン
「エンタメニッポン
〜江戸からLIVE!相撲・落語・歌舞伎〜」
渡辺このか



メディアコミュニケーション
デザイン
「アナタ×エモジ」杉浦さくら
大学賞 優秀賞



メディア
コミュニケーション
デザイン
「私はタイを知りたい」
上村理代



メディアコミュニケーションデザイン
「WORLD SIGN」丹羽美月



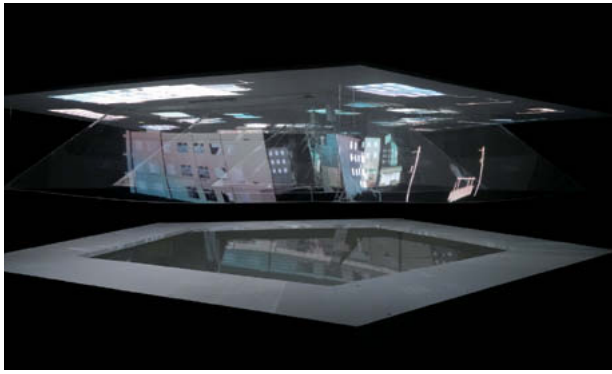
メディアコミュニケーションデザイン
「Youth<at aichi>」中村梨央



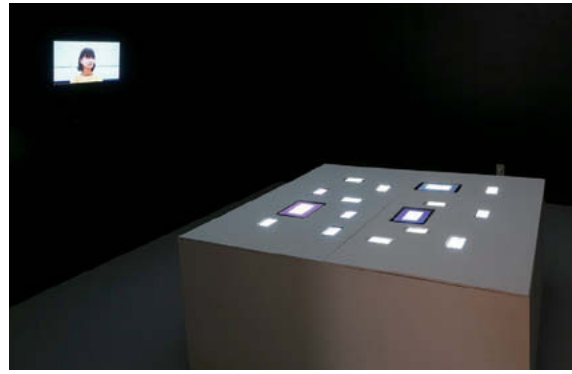
メディアコミュニケーションデザイン
「AICHI NO TABI」横田実奈



メディアコミュニケーションデザイン
「IYODA MUSIC OFFICE」伊與田千星



メディアデザイン
「モノの側面」山田幸
大学賞 優秀賞
協賛賞 学生食堂賞



メディアデザイン
「空間」諸星志づく
ブライトン大学賞
奨励賞



メディアデザイン
「idola」待井雄太



メディアデザイン
「recorded」柴田丈太郎



メディアデザイン
「不安定な」中本千恵



メディアデザイン
「harp stage」水越麻友
大学賞 優秀賞



メディアデザイン
「Bungu Beats」柄井雄太



ブライトン大学賞
佳作



メディアデザイン
「ALEK (自動照明電子ピアノ)」
所香菜子



メディアデザイン
「originality」所香菜子
ブライトン大学賞 佳作



メディアデザイン
「5x5=∞」林瑞希



メディアデザイン
「Abyss(K)night」
森安健太

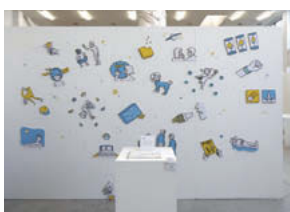


メディアデザイン
「otonari」伊藤綾香



メディアコミュニケーション
デザイン
「私を守るべき夜について」
遠藤葉月
大学賞 優秀賞

メディアデザイン
「食物アレルギー project」加藤菜月
大学賞 優秀賞



メディアコミュニケーションデザイン
「宇宙生活」平岩紀香

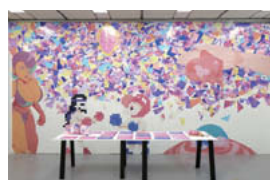


メディアコミュニケーションデザイン
「見れば観るほど発見」村瀬きらら



メディアコミュニケーションデザイン
「私のブックデザインについて」吉田美咲







ヴィジュアルデザイン
「あのひのたんぼみち」渡邊結機
フライング大学賞 佳作
大学賞 優秀賞
協賛賞 美術・デザイン同窓会賞



ヴィジュアルデザイン
「線を描く-線×身体-」
川島萌佳
大学賞 優秀賞



ヴィジュアルデザイン
「神ノ使イ絵巻」大島あおい



ヴィジュアルデザイン
「表象」関祐次郎
大学賞 優秀賞



ヴィジュアルデザイン
「にがえびース」鳥居まみ



ヴィジュアルデザイン
「それだけじゃないかもしれない」
山田美乃里



ヴィジュアルデザイン
「ことばのすがた」榊奈々未



ヴィジュアルデザイン
「ウェイクラム」白田宣希



ヴィジュアルデザイン
「abstract」柳田将希



ヴィジュアルデザイン
「リサと奇妙な住民たち」
鳥谷部沙也香



ヴィジュアルデザイン
「あい・えぬ」伊藤朋菜



ヴィジュアルデザイン
「心の間の怪」城崎乃



ヴィジュアルデザイン
「Cloud Types」木下沙季



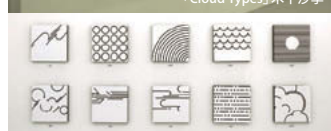
ヴィジュアルデザイン
「歌視化」
加藤太風



ヴィジュアルデザイン
「影から見える非日常」上村唯菜



ヴィジュアルデザイン
「nostalsis」山崎悠



ヴィジュアルデザイン
「Libro stella」高田真衣



ヴィジュアルデザイン
「Meta morphose」堀田翔也



ヴィジュアルデザイン
「曼陀羅」藤川祥代



ヴィジュアルデザイン
「ものがたりタイル」林美優



ヴィジュアルデザイン
「なまげくまキッチン」新井美穂



ヴィジュアルデザイン
「闇鍋ドン!!」釜田恭兵



メディアコミュニケーションデザイン
「笹基之助が見たメーストの村」
饗庭真由子



メディアコミュニケーションデザイン
「表情と感情」萩原円佳



メディア
コミュニケーション
デザイン
「LIKE a ヒヨキ」
中村実弘



イラストレーション
「Project: future paradox」甲斐亮
大学賞 優秀賞



イラストレーション
「幻獣研究所」早風涼子



イラストレーション
「日常怪異」藤本敬人



イラストレーション
「理義字擬人化"リギジカ"」田中隼人



イラストレーション
「BANSHEE TAIL」戸澤怜奈



イラストレーション
「いちばんじゃ
なくていい」
西早織

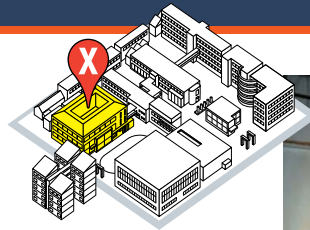


イラストレーション
「一瞬の輝き」石田優香



イラストレーション
「三度目は偽善者を」渡邊悠希





大学賞 優秀賞

メタル&ジュエリーデザイン
「weekly planet」大河内玲央



メタル&ジュエリー
デザイン
「進化と想造」
川原夏希



メタル&ジュエリーデザイン
「Tokyo Melt Down -SHIBUYA-」
金児亮哉



メタル&ジュエリー
デザイン
「old fashion」
山本康平



メタル&ジュエリーデザイン
「Vampir memories」泉明日香



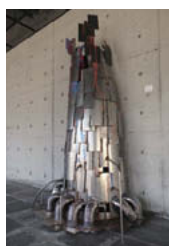
メタル&ジュエリーデザイン
「王冠」山下聖香



メタル&ジュエリー
デザイン



メタル&ジュエリーデザイン
「風神雷神舞姫図」神田真由



メタル&ジュエリーデザイン
「木」駒田 悠輔



メタル&ジュエリーデザイン
「絵の子供と生活」井上望結



メタル&ジュエリーデザイン
「王冠」山下聖香



メタル&ジュエリー
デザイン



デザインマネージメント
「遊びのかげ」大崎晴
大学賞 優秀賞



デザインマネージメント「」川地真由
ブライトン大学賞 佳作



デザインマネージメント
「あてじゆうちょう」水谷朋



デザインマネージメント
「すべての猫を救うために
猫の手を借りる」伊藤咲



デザインマネージメント
「わたしを演じさせるもの」中崎真琴



デザインマネージメント
「『気配』売ります。」湯島未来



デザインマネージメント
「今日も生きて偉い」水谷文音



デザインマネージメント
「片耳難聴を知っていますか?」
新海里



デザインマネージメント
「『切り株』の記憶」森田健



デザインマネージメント
「客観的視点-抽象的な文章は展示になり得るか?」
豊島菜通美



デザインマネージメント
「ROCK meets Babys!」堀池亜矢



メディアデザイン「チェストリア」小野瑞穂



メディアデザイン
「CB-ビール製造」
鈴木晴美



メディアデザイン
「co-free」寺田由充香



メディアデザイン
「フツ恋」平手風香



メディアデザイン
「裏側のよくある話」
小崎梢恵





メタル&ジュエリーデザイン
「御まごト」池田若菜
大学賞 優秀賞



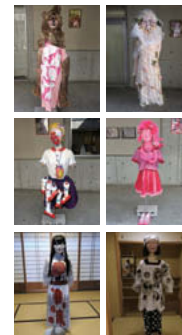
「涙」前地知哉



メタル&ジュエリーデザイン
「Your jewelry」富永侑里



テキスタイルデザイン
「ヒトカワムケル」杉山沙衣



テキスタイルデザイン
「私が物語を演じたなら」岡野みちる



メタル&ジュエリーデザイン
「星めぐりの歌」細江花



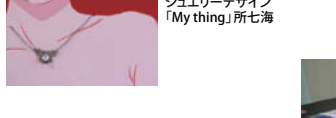
メタル&
ジュエリーデザイン
「My thing」所七海



メタル&ジュエリーデザイン
「鉄鍋稲荷具足」加藤最也



テキスタイルデザイン
「yurameki」石田智子



カーデザイン「MOBI LABO」大塚優太郎
大学賞 優秀賞 プライム大学賞 佳作



インダストリアル&セラミックデザイン
「想送花-sousouka-」寺本瑞伎
大学賞 優秀賞 協賛賞 画社ウィーナス賞



インダストリアル&セラミックデザイン
「grow up」浅井かな子



インダストリアル&
セラミックデザイン
「PAIR STANDER」
井上大曜



インダストリアル&セラミックデザイン
「Luck sack」水田龍之介



インダストリアル&セラミックデザイン
「porcelain and light」高田柊人



インダストリアル&セラミックデザイン
「一粒のやきもの」杉山美紀



インダストリアル&セラミックデザイン
「wall panel with aroma」牧野圭梧



インダストリアル&セラミックデザイン
「コンバット日本行事」橋本玄



インダストリアル&
セラミックデザイン
「憩(いこい)」春日井宏美



メディアデザイン
「フクロウ」杉山綾菜



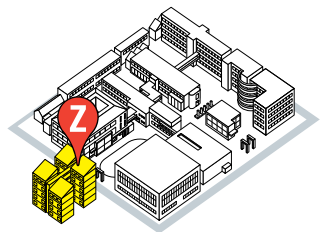
メディアデザイン
「FLOCKI」芦澤由希



メディアデザイン
「ご当地deお子様ランチ」
高谷玲愛



メディアデザイン
「舞台における映像の可能性」田代京香



洋画1
「I want to find light even in the dark」
土森奈織



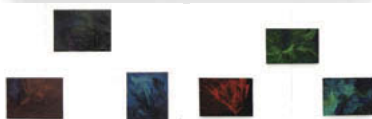
洋画2「では、あなたは人間ですか?」浅野克海
大学賞 優秀賞 北名古屋市長賞
ブライトン大学賞 佳作



洋画1「天空の鏡」寺本幸加 大学賞 優秀賞



洋画1
「男がみたもの」
「振り子」
高橋美奈



洋画1「NEBULA/EARTH/SOLA FLARE」岩月綾乃



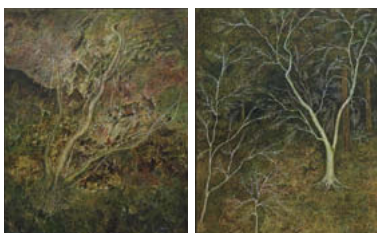
洋画2「怜」佳奈子 他
若附美穂



洋画2「Doon city」他 陽川直利



洋画2「花」大野真菜



洋画1「風化」「静寂」
山本典式



洋画2「幕」西山実果



洋画2
「化粧箱」中西奈々



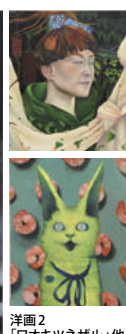
洋画2「嫉視の同居」武井志奈



洋画2「Daydreaming」下村満理奈



洋画2「少女たち」小川那千華



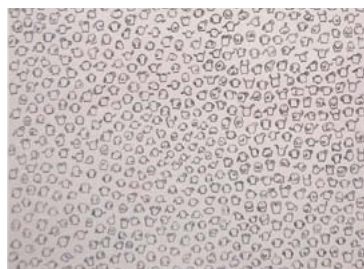
洋画2
「ワオキツネザル」他
沖田あかり



洋画2「無題」山内美友紀



洋画2
「Solitary journey」
中山紗理奈



洋画2
「バーチャルユーチューバー」
「自作曲とその映像」他
西宮拓登





洋画2「南の聖宿」他 阿田智貴



洋画2「CHASHITHU」高橋遼
大学賞 最優秀賞



洋画1「瞬間の現実と永遠の空間」星の欠片 岩月綾乃



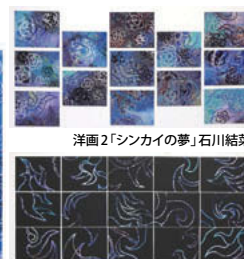
洋画2「Your green」野村純里



洋画1「みち」「みちII」中村怜



洋画2「シンカイの夢」石川結葉



洋画1「金魚」
寺本幸加

洋画2「無題」中村豊治

洋画2「Marchen」他 稲垣結美



洋画1「スーリヤナマスカラ」「煉獄」
四谷衣里



洋画1「安堵と危惧」「にゃんすけ」
竹内りえこ



洋画1「大猫札道中」他 加藤麻鈴



卒業制作展も終盤に差し掛かった2月28日(金)、B棟大教室にて、卒業制作展優秀賞ならびにブライトン大学賞が発表され、授与式が行われました。例年ならば、授与式の後、祝賀会が催されるのですが、今年は新型コロナウイルスの影響もあって残念ながら中止となり、授与式のみ開催となりました。竹本学長から、空間を表現する美術、デザインの学生にとって大学という制作の場で作品を展示することは大いに意義のあることではないか、と挨拶があり、授与式は始まりました。

優秀賞、ブライトン大学賞ともに、美術領域4コース、デザイン領域10コースから選定されます。卒

卒業制作優秀賞、ブライトン大学賞 発表

業制作展最優秀賞は、洋画2コース 高橋遼(たかはし りん)さん「CHASHITSU」、テキスタイルデザインコース 中嶋すみれ(なかじま すみれ)さんの「花束ワンピース」、ブライトン大学最優秀賞は、スペースデザインコース 伊藤航大(いとう こうだい)さんの「継手家具・婆娑羅」が受賞しました。

ブライトン大学からお越しいただいたカテリーナ・ラドバン先生からは、「ブライトン大学と名古屋芸術大学の長年にわたる友情を非常に大切に思っています。交換留学を始めてから23年、お互いの大学、また、学生にとって非常に有意義であることを確認し、遠く離れていながらも共同何かを創るテクノロジーについて話し合いました。ブライトン大学でもコースの再編成が行われ、より意見交換や共同作業がしやすくなると思われます。卒業制作展を鑑賞し、何人かの学生と話をしました。作品にも、またプレゼンテーションにも大いに感銘を受けました。最優秀賞を決めることは非常に困難でしたが、ノミネートされた学生、また選に漏れた作品もすべて非常にレベルが高く、創造性に対し

て敬意を表したいと思います」とのお言葉をいただきました。

授与式に併せて、愛知県美術館で開催される卒業・修了制作展(※)で出展される作品発表がされ、授与式は終了となりました。

(※新型コロナウイルスの影響で中止)



全受賞者で記念撮影

※各賞は「名古屋芸術大学通信Web版」で公開

マスター ↑↓to アーティスト 【第48回】 〈何かはじまる!?〉

田村友一郎

(たむら ゆういちろう)

美術領域 准教授

<http://www.damianoyurkiewicz.com/>

1977年 富山県生まれ

2003年 日本大学芸術学部写真学科卒業

2013年 ベルリン芸術大学空間実験研究所在籍

2017年 東京藝術大学大学院映像研究科博士
後期課程修了

【主な個展】

2017年

■「討論：栄光と終末、もしくはその週末/Week End」

小山市立車屋美術館、栃木

■「G」ユカ・ツルノ・ギャラリー、東京

2018年

■「叫び声 / Hell Scream」

京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA、京都

2019年

■「Milky Mountain / 裏返りの山」

Govett-Brewster Art Gallery, ニュージーランド

【主なグループ展】

2017年

■「日産アートアワード2017」BankART NYK、横浜

■「Festival of Future Nows」

ハンブルガー・バーンホフ現代美術館、ベルリン

■「Mode of Liaison」BACCバンコクアートセンター、タイ

2018年

■「Signature Art Prize 2018」

国立シンガポール博物館、シンガポール

■「釜山ビエンナーレ2018」釜山現代美術館、韓国

■「The Fabric of Felicity」GARAGE現代美術館、モスクワ

2019年

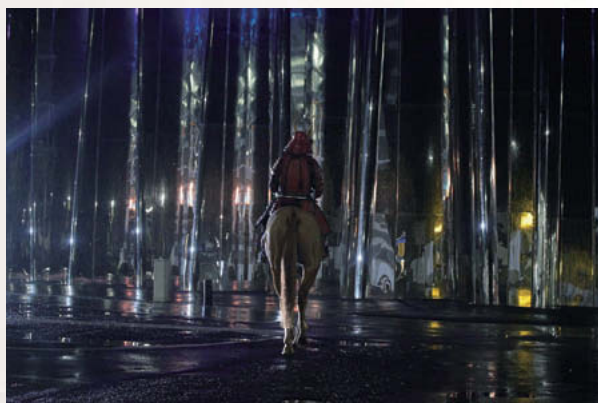
■「Asian Art Biennial 2019」国立台湾美術館、台中

■「話してるのは誰？」国立新美術館、東京

■「六本木クロッシング2019展」森美術館、東京

■「美術館の七燈」広島市現代美術館、広島

■「私はどこにいる？」富山県美術館、富山



「Milky Mountain / 裏返りの山」
Govett-Brewster Art Gallery, ニュージーランド, 2019



「Two Shadows」
ハンブルガー・バーンホフ現代美術館、ベルリン, 2017

「栄光と終末、もしくはその
終末 / End Game」
日産アートアワード2017、
BankArt Studio NYK、
横浜, 2017



け入れられるように構成し直して提示
するという行為は、極めて芸術的な行為
かもしれない。しかも、面白くてハチャ
メチャな具合が、なぜかとてもポジテ
ィブな気分させてくれる。現代社会
と現代アートの係わり方のひとつかもし
れない。

自由過ぎる発想の源が知りたくて、
経歴について伺ってみる。大学は、日大
芸術学部写真科卒業だったはず。だが
意外なこたえが返ってきた。「もともと
専修大学文学部人文学科社会学コース
というところに行っていて、2年で辞め
て日芸に入ったんです」富山出身の田
村氏は、東京に出たいと大学を受験。
当時、流行っていた社会学に進みたい
と考え専修大学に入学した。しかし、そ
こは私立のマンモス校。学生の数も多
く、授業を受けていても手応えを感じ
なかったという。大きな集団に埋没し
ていくように感じてしまい、2年を経た
ところで大学を辞めてしまう。在学中に、
日大芸術学部のことを知り、映画学科、
放送学科、写真学科を受験。映画志望
だったが合格できず、滑り止めのつもり
で受けた写真学科に進む。「編入では
なく、再入学だったので、教養の授業も
また一からです。絵画でもそうなんです
けど、写真学科では、自分が生み出した
作品に対してダイレクトに評価が下され
ます。そのことにはとても衝撃を受けま
した。芸術大学の特殊な評価体系とい
うか、こういった経験はその後の人生に
おいても必ず活かしてくることかなと。
つまり、こういう表現行為をやっている
のとやっていないのでは、トータルの人生

「今、依頼されているプロジェクトは、
兵庫県の豊岡市に城崎温泉があるの
ですが、そこに城崎国際アートセンター
というところがあって、そこで何かでき
ないかという相談を受けました。豊岡
市は、6つの自治体が合併して今のか
たちになっているんですけど、それぞ
れの自治体に美術館や博物館があった
ようで、例えば日本・モンゴル民族博
物館というんだかよくわからない博物
館があったりするんです。そして豊岡
の市立美術館には、地元出身の洋画家、
伊藤清永の『磯人』という巨大な作品
があるんですけど、大き過ぎて外せな
いという逸話もあって、企画展のたびに
仮設の壁を立てて『磯人』を見えないよ
うに隠して展示したりしてるんです。そ
の状況が面白くて、せっかくなので今
回のプロジェクトではその『磯人』を軸
にして展開しています。あわせて、日
本・モンゴル民族博物館からは抽象的

な収蔵品を借りてきて美術館のガラス
ケースに展示しています。プロジェクト
の設定として、地球に何かが起こって人
間がいなくなった荒廃した未来という
SF的なものになっています。なので、展
示されているそれぞれの物が持つ情報
はあえて無効化しています。メインビ
ジュアルは地元出身の漫画家ひうらさ
とるさんに『磯人』をモチーフに描いて
もらっています。あとは地元出身のもの
まねタレントのミラクルひかるさんにも
映像に参加してもらったり。地域資源
を活用して作品にする、というよくある
枠組みではありますが、それをかつて
ないぐらいのかなり振ったかたちで試
みしています」伊藤清永の洋画にモン



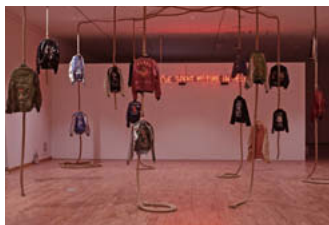
©ひうらさとる

ISDRSI
磯人麗水

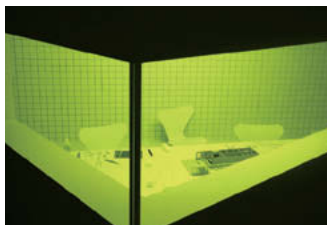


ゴル？ 漫画？ SF？ といくつも「？」
マークが頭上に並んでしまうのだが、と
てもユニークかつ斬新にも聞こえる。
「日本・モンゴル民族博物館にSF的な
設定の話を持っていくわけじゃないで
すか、ふつう断られると思いますよね。
それが意外やウェルカムな感じなん
です。考えてみれば、日本全国にはこの
ような小規模な美術館や博物館がたく
さんあるんですよね。予算が豊富にあ
るわけでもなく、できる範囲で展示を
廻していく、そういったことにある種
の限界があるんだと思います。今回の企
画を面白がってくれて、貴重なコレク
ションを貸してくれることになったん
ですが、関係者みなこのシュールな状
況を楽しんでくれているようです」

いわゆるファインアート、既存の芸術
の範疇からは大きくはみ出したような
作品になるのだが、主旨は地域資源の
価値の再発見であり、それを社会に受



『The Spider's Threads』
釜山ビエンナーレ2018、釜山現代美術館、2018



『Sky Eyes』
国立新美術館、東京、2019



『MJ』
森美術館、東京、2019



『玉蟲に見る夢 / Midnight Rainbow』
BACCバンコクアートセンター、タイ、2017



ベルリン芸術大学傘下の空間実験研究所では、国際的に活躍する多彩なゲストが招かれレクチャーが行われる。世界を代表するキュレーター、ハンス・ウルリッヒ・オプリストによるレクチャーという日も



中国でのリサーチプロジェクトのため、クラスメイトとベンベア鉄道で北京へ向かう。集合場所と日時のみ決まっており、そこへの行き方は学生に委ねられている



教員と学生の垣根を越えたリラックスした雰囲気の中、ディスカッションが行われる



クラス展示では、学生による救急車を呼ぶというパフォーマンスも



の豊かさという点で大きな差がでてくるような気がしています」 留年しつつもなんとか卒業を迎え、雑誌「暮しの手帖」を発行する暮しの手帖社にカメラマンとして入社する。「日芸の写真学科では在学中から出版社やスタジオ、カメラマンのアシスタントなんかのアルバイトをみんなするんです。なので、そのままアルバイトにのめりこんで大学を辞める同級生も多かったです。暮しの手帖社は、編集として入っていた同級生からカメラマンの募集があると聞いて受けました。僕自身、暮らしとかに興味があったわけじゃないんですが、卒業してもお金もないし、フリーでいてもどうにもならないし、であれば就職するのもいいかなと。そこから4年半、社員カメラマンとして勤めました」ところが、出版不況のあおりを受け、業務は縮小。4人いた写真部も、1人抜け、2人抜け、最終的には自分一人になってしまう。「雑誌の編集方針も時代とともに変わって、フリーのカメラマンを使うことが増えて、自分は窓際族みたいになっていったんです。撮影よりも図版整理の仕事が増えていきました。連載しているひとのページに必要な写真を用意する仕事なんですけど、その頃、佐藤雅彦さん（現東京藝術大学大学院映像研究科教授。電通時代はCMプランナーとして、湖池屋「スコーン」「ポリンキー」「ドンタコス」、NEC「パズールでござーる」を手がけ、NHK教育「ピタゴラスイッチ」の監修、「だんご3兄弟」の作詞・プロデュースも）の連載コラムがあり、東京藝大の大学院に映像研究科というのがあることを知りました」それで、仕事を辞めて大学院へ進むことになる。仕事を辞めるとなると、かなりの決意があるように感じるがそうではないという。「そのときは、“逃げ”じゃないけど、それほどポジティブだったわけでもないですよ。仕事が面白ければ続いていますよ。今となっては、奮

起して努力してって見えるかもしれませんが、自分の仕事が減ってきて負の状況からのエスケープみたいなものです。会社も、ただ辞めるといって、このあとどうするんだみたいなことになりすけど、大学院へ行きますとなると、発展的なことで辞めるんだと思われて、よかったねと（笑）」

2年の修士課程を経て博士課程に進み、結局、7年を費やし修了となる。この間、一番刺激になったのは世界的アーティスト、オラファー・エリアソンの教育プログラムに参加したことだという。「2013年に文化庁の海外派遣でベルリン芸術大学傘下のオラファーが主宰する空間実験研究所というところになりました。研究所の70%くらいがベルリン芸大の学生、残りは外部からの参加者です。5年間の期間限定プログラムで、僕は1年しか参加できませんでしたが、そのとき経験したことが今思えばとても大きい。オラファーが特に何か教えるわけではなく、ゲストを呼んでのレクチャーやワークショップが主で、あとはみんなで外に出かけて、その土地、その場で何かしら仕掛ける。場所に対してアクションを起こすというか。それを延々とやるんです。いわゆる日本の一般の美大でやっているような“作品を創る””という概念とは少し違う気がしました」

学内でも、そんな美術との接し方を広げていきたいと話す。「洋画というキャンパスがあって、そこに向かいますよね。つい内省的になって、自己を掘り下げていくパターンになりがちです。それもいいんですが、見ていると、どうもみな同じようなドツボにはまっています。例えば、キャンパスの外に目線を持っていてみる。すると外で何か起きている、得体のしれない何かがあります。そんなことを引き起こしていければと思います。全然領域の違うひとに来ていただいて、従来の自分とは全然異なったものができあがっていく。そのような環境作りみたいなことも試してみたいと思っています」

やっぱり、わかるようで、よくわからないような……。でも、何か面白そうなのが始まる予感を強く感じる。



大学院に進み、佐藤雅彦さんの著書「新しい分り方」(中央公論新社)の写真を担当することに。2009年の修士2年次に始まった撮影はあいだに長い中断を挟み、2016年に撮影が再開。2017年に晴れて刊行した

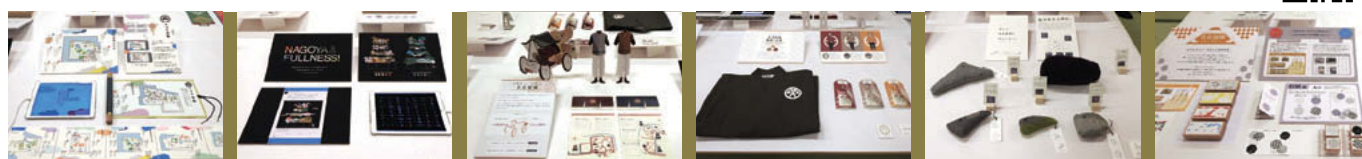




名古屋芸術大学
産学官連携
プロジェクト
Vol.2

ヴィジュアルデザインコース 名古屋城本丸御殿にて「ナゴヤ展」を開催

全ての作品は
こちらから
ご覧いただけます



2020年2月14日(金)～18日(火)、名古屋城本丸御殿・孔雀之間にて、ヴィジュアルデザインコース3年生による展覧会「ナゴヤ展」を開催しました。「ナゴヤ展」は、例年ヴィジュアルデザインコース3年生が取り組んでいる課題で、名古屋の特定の場所をデザイン的な観点から捉え直し、新たな価値を発見・創出して提示するという課題。昨年から、名古屋市観光文化交流局の協力を得て、名古屋城本丸御殿にて作品を展示、名古屋城の職員の方・関係企業の方々からも講評をいただくこととなりました。

今年のテーマは「名古屋城の本質的な価値を伝えるデザイン」。名古屋城の天守閣やシャチホコなどは多くの方がイメージする名古屋城の魅力ですが、それ以外にもたくさんの魅力があるはずと、学生らは何度も名古屋城へ足を運び作品を制作しました。



また、名古屋市観光文化交流局 吉田氏には来校していただき、名古屋城の歴史について講義を行っていただきました。4ヶ月の制作期間のうち多くを調査に充て、しっかりとした内容のものに仕上がりました。

名古屋城の魅力について、歴史的な面白さが外国人や子ども、歴史にあまり関心を持たない人には伝わりにくくして、わかりやすくヴィジュアル化して伝える作品、場内にある自然や建築・石垣などをモチーフとした作品、お土産や場内で履くスリッパなど、作品は多岐にわたり、それぞれがユニークなものとなりました。担当す



るヴィジュアルデザインコース 遠藤一成准教授は、「さまざまな人のご尽力とご縁で、こうして本丸御殿で展覧会ができることになり感謝しています。シャチホコや天守閣といった紋切り型のイメージだけではなく、新しいものの見方や価値観を、学生だけでなく名古屋市のの方々やお越しいただく観光客の方々にも知っていただくことになれば、こんなに嬉しいことはありません。名古屋城だけでなく、名古屋の街づくりや史跡についての作品もありますし、こうしたことをきっかけに関心を持っていただければと思います。いろいろな形式でのアプロ

ーチや学生の個性も表れており、そこもぜひ見ていただきたいです」とコメントしました。

講評は、学生ひとりひとりが作品について説明し、それに対して意見を伺いました。子どもや外国人にもわかりやすく伝えられることや、さまざまなアイデアが提示されたことを高く評価いただきました。名古屋市観光文化交流局 吉田氏からは「着眼点の良さ、作品のできばえにも驚きですが、学生のみなさんが、一所懸命調べて名古屋城のことを思ってくれています。そのことが作品から伝わってきて、すごく嬉しいです」との言葉をいただきました。また、日頃から歴史的な価値をどうやって伝えていくか腐心していることや、いくつかのアイデアはぜひ実現したいと、関係者ならではの発言もあり非常に有意義な講評会となりました。



表紙の写真

テキストデザインコース
「AKM ワンダーランド」角屋美空



「名古屋芸大
グループ通信」
ウェブサイト



発行：名古屋芸術大学
企画・編集：広報企画部
デザイン・協力：くまな工房一社
印刷：株式会社クックス
発行日：2020年4月24日

【お問い合わせ先】
名古屋芸術大学 広報企画部
〒481-8502
愛知県北名古屋市熊之庄古井281番地
電話 0568-24-0359
FAX 0568-24-0369
E-mail: grouptu-shin@nua.ac.jp



※記事中のホームページアドレスは、掲載先の諸事情で移転や閉鎖されている場合がございます。あらかじめご了承ください。